

1960 年代初頭の日本での「台湾論」：吉村暁、加藤芳男 『自由中国の表情』を例として

淡江大学日本語文学系
富田哲

はじめに

1965 年刊の『週刊朝日』の書評欄に、朝日新聞の蔵居良造によるコラムが掲載されている¹。これは 1961 年以降に出版された台湾関連書籍の寸評で、「昭和三十六年十月、台湾に関する本が一度に四冊出版された」との一文で始まるが、この 4 冊とは、木内信胤『現代の台湾』、吉村暁、加藤芳男『自由中国の表情』、大村立三『二つの中国』、近藤俊清『台湾の命運』である²。一連の刊行が相互に関連しているのかわからないが、当時の日本社会で台湾に関心を向ける者にとってはきわめて重要なできごとだったようである。それは 1963 年刊の『台湾の表情』が、「戦後は台湾関係の文献はきわめて少なく、単行本としてはわずか四・五冊が市販されたにすぎない。しかも実証的な研究はほとんどといってよいほどなく、印象記や紹介記事、あるいは一定の立場に立った主張といった感じのものが多く」としていることからうかがえる³。上述の木内も、「私は、「現代」の台湾に関する研究書を探し求めたのであるが、遺憾なことに、そして意外なことに、しかるべき研究書は絶無といつていいらしいことを発見したのである」と言っている⁴。

ただ、『二つの中国』は台湾そのものに主たる視線を向けているとは言えない。報告者は、『現代の台湾』『自由中国の表情』『台湾の命運』を戦後日本の「台湾論」に大きな画期をもたらした書籍であると考え。後年、アジア経済研究所の初の外国籍研究員となった戴国輝も、これらを「1961 年の記念すべき 3 冊の本」と称している⁵。

本稿では、とくに『自由中国の表情』（以下、『表情』）が語る台湾について、同じく蒋介石政権を支持する日本人著者が短期間の訪台での見聞をもとに執筆した『現代の台湾』（以下、『現代』）も参照しながら論じるが、本論に入る前に、この時期の日本と台湾の関係をめぐる状況を確認しておく。1950 年代後半から、米国政府は

¹ 蔵居(1965:81)。ほぼ同内容の書評が 1965 年 2 月刊の『台湾青年』51 号、59-60 頁に転載されている。

² 木内(1961)。吉村、加藤(1961)。大村(1961)。近藤(1961)。

³ 東南アジア研究会(1963:226)。この研究会は 1961 年初めに東京大学教養学部教養学科人文地理学分科の学生らによって組織された。執筆者 6 人は約 1 年にわたる文献の講読や討論の後、同年 12 月に台湾で調査をおこなった。

⁴ 木内(1961:13)。

⁵ 戴(1969:75)。春山明哲は、日本での台湾史研究は 1970 年代前半から本格的に始まったとしており、研究者グループの嚆矢として、戴らが 1978 年に設立した台湾近現代史研究会の前身の東寧会をあげている。東寧会は 1970 年ごろに始まったという(春山(2019:43))。

蒋介石の「大陸反攻」の目標を否定はしないものの、実際にそれを許すことはなく、二つの「中国」政権が対峙する現状を維持し続けようとした⁶。日本では、60 年安保での岸信介内閣の退陣を受けて 1960 年 7 月に成立した池田勇人内閣は、米国の日本中立化に対する懸念、すなわち日本が米国と距離を置きつつ中華人民共和国との関係強化を志向するのではないかという不安を払拭すべく、西側陣営の一員として米国との同盟強化の姿勢を打ち出していた。また国府との関係も維持しながら、一方では経済貿易面で北京政府との関係推進もはかろうとした。外務省は、1961 年初頭から中国政策の見直しに動き始め、明確な「二つの中国」政策に立脚するようになっていたが、こうした動きに対して国府は警戒や反対を強めていた⁷。

以上の背景のもとで「台湾論」の画期がおとずれたわけだが、この時期の日本社会の台湾に対する視線については、左派勢力が台湾にさしたる関心を向けてはいなかったこと、またかれらが身近で展開していたはずの在日台湾独立運動に対しても不正確な理解を有するにとどまっていたことが指摘されてはいる⁸。しかし、それをのぞけば、これまでくわしく探求されてこなかったのではないだろうか。

さきまわりして言うと、『表情』の二人の著者は 1961 年 7 月末から 8 月初めにかけ 1 週間あまり台湾をおとずれたが、戦前・戦中の中国との縁の深さを強く意識しており、この訪台を 16 年ぶりの中国再訪と位置づけていた(はしがき 1-2 頁。以下『表情』については該当ページを数字のみでしめす)。かれらの台湾＝自由中国への旅行はなぜ、どのように企画されたのか。またいかなる機関や人々がこの旅行にかかわっていたのだろうか。

戴国輝による日本の中国研究者批判

戴国輝は上述の論文を、「戦後の日本において、本当に回顧に値し、展望すべき段階に「台湾研究」は現在あるのだろうか」というなげきで始め、1965 年刊の『現代中国入門』に言及している。『現代中国入門』は竹内好が「暫定代表者」となっていた「中国の会」が中国関連文献のてびきとして出版したものだが⁹、戴は編者の新島淳良が「台湾問題」の項で、『表情』『現代』『台湾の命運』を批評していることを紹介する。新島の批評そのものは以下のとおりである。

まず蔣政権支持の立場で書かれた本にはつぎのようなものがある。

吉村・加藤著『自由中国の表情』(一九六一)。これは岸信介に随行した読売新聞記者のかいたもの。完全によいところだけ

⁶ 清水(2009:72)。

⁷ 井上(2007:184-195)。清水(2009:76)。吉次(2001:37-51)。

⁸ 森(2001:19-34)。

⁹ 新島、野村(1965:279-280)。

をみせられてそれをうけうりした、くだらない本である。

木内信胤『現代の台湾』（一九六一）。これは世界経済調査会の編で、一口に言えば国府側の P・R をそのまま紹介した文章で、アメリカの（といっても国府の発表した数字をう呑みにした）報告書を附録として抄訳してある。偉大で繁栄する台湾という印象を与えようとして、農地改革などを讃美している。こういう本にたいしては、朝日新聞社の特派員で台湾に行った近藤俊清の『台湾の命運』（一九六六（ママ）、みすず・ぶっくす）がよい解毒剤になる¹⁰。

新島は「蔣政権支持の立場で書かれた本」として『表情』と『現代』を批判的に論じる一方で、朝日新聞の元台北特派員が書いた『台湾の命運』には一定の評価を与えている¹¹。これに対して戴は、「日本の代表的中国研究者の一人でもある新島」の台湾に対する視線に疑問をなげかける。

本来「台湾研究」をワシントン、北京、国際情勢、国府の関係での表層観察にとどまらず、台湾の民衆、その内部における政治諸勢力の動向にも注目することがあれば『自由中国の表情』の蔡培火に対する訪問や、雷震事件に関する記述から多くの研究の糸口もしくは示唆を受けられるはずのものであるが、いかんせん台湾研究に真正面からとりくむ姿勢がないところには「目」はついてこないのが当然なのである。同様に『現代の台湾』についてもいえる。IMF の性格、IMF と国府の当時の関係、IMF のペーパーのもつ意味などに吟味の目を注ぐことがあれば、同ペーパーを「アメリカの（といっても国府の発表した数字をう呑みにした）報告書を附録として抄訳してある」とだけはいわれまい¹²。

蔡培火や雷震事件については後述するが、戴はここで『表情』や『現代』を評価しているのではない。続けて「良書悪書を判定する基準は人によって異なるが、「悪書」もまた「良き資料」たりうることは筆者の指摘をまつまでもあるまい」と述べており、むしろその逆である。内容の是非以上に戴が問題にするのは日本の中国研究者の姿勢である。すなわち、かれらが台湾を「北京」「国際情勢」「国府」の従属変数としてしか見ていないことを批判し、台湾に住む人々やその政治状況を等身大で論じるよう訴えているのである。

もっとも、戴自身は台湾研究を中国研究の一部と位置づけているし¹³、国民党政権が推進する「国語普及運動」を「中国の言語統一」が必要であるとの立場から肯定するなど、台湾ナショナリズム

¹⁰ 新島、野村(1965:272-273)。

¹¹ ただし、著者の近藤が「はっきりと台湾の独立運動を支持している。その点を十分に注意する必要がある」と警戒してもいる(273 頁)。

¹² 戴(1969:76-77)。

¹³ 戴(1969:54-55)。

には否定的な立場をとっている¹⁴。しかし、そのことと台湾を台湾として語るべきであるという主張が戴のなかで矛盾しているわけではない。戴は、台湾は中国の一部であるとする一方、日本の植民地統治開始以降、1940 年代後半の一時期をのぞけば中国大陆とは別の統治体制のもとにおかれ、ことなる歴史を歩んできた台湾に正面から向き合うべきだと呼びかけているのである。それは、「中国研究者が台湾を自己の研究対象に正しく組みこむ」ことである¹⁵。

戴は 1961 年刊の 3 冊に「60 年代の初頭において、これまでの論調の主流とは異なり、はっきり保守の側からいわゆる台湾問題を自己の問題の中に組み込んでそれを主張しはじめた」ことを見てとっていた。戴は、政治的にあいられない著者が台湾を主題化したことに新しさ感じながら、共闘が可能なはずの中国研究者が「保守の側」に先をこされる状況に、焦燥を感じていたのではないだろうか。

吉村暁と加藤芳男の台湾の旅

『表情』の著者紹介によると、吉村暁は 1927 年に長春で生まれ、大連第一中学、旅順高校にまなんだ。1945 年 8 月に応召し四平で終戦をむかえたという。1947 年に引き揚げ、1952 年に東京大学文学部宗教学宗教史学科を卒業している。著者紹介はここで終わっており、本文中にも現職はしるされていないが、彼の 1992 年刊の著書では、1952 年に読売新聞社に入社し、文化部長などを経て 1982 年に定年退職したとある¹⁶。そうだとすれば、吉村は 1961 年時点で読売新聞社に在籍していたことになり、上の新島の記述とも一致する。

加藤芳男は 1924 年に千葉県で生まれ、早稲田大学専門部政経科を卒業して同盟通信の記者になった。軍歴は不明だが、「はしがき」に中国戦線で戦ったとある。敗戦後はシベリアに 4 年 2 か月抑留され、1961 年時点では衆議院議員寺島隆太郎の秘書をつとめていた(著者略歴、はしがき 2)。寺島は当時の千葉 2 区選出で自民党岸派に属していた議員であり、同年 1 月には川島正次郎ひきいる岸派衆議院議員 8 名の訪問団に参加して総統蒋介石と会見している¹⁷。

¹⁴ 戴は、『台湾の命運』が台湾独立を主張する台湾青年社刊の『台湾青年』所載の複数の論文を剽窃していることを疑われた「いわくつきの書」ととし、「論議における近藤氏の弁明から、本稿で取りあげるより、むしろ後日執筆予定の「台湾独立運動家による台湾研究」においてふれることのほうがふさわしいと考え割愛する」としている(戴(1969:76))。「近藤氏の弁明」とは 1962 年 2 月の近藤の反論のことである(近藤(1962))。

¹⁵ 戴(1969:55)。

¹⁶ 吉村暁『少年たちの満洲』自由社、1992 年、著者紹介。

¹⁷ 千葉県総務部統計課(1962:109)。渡辺(1958:236)「總統招待日本眾議員訪華團茶會談話簡要紀錄」(1961 年 1 月 3 日)、「張羣先生文卷—總統接見日人談話案(一)」，《蔣中正總統文物》，國史館藏，典藏號:002-110400-00003-003。寺島は戦前、報知新聞の北京支局長や論説委員をつとめ、1946 年の衆議

吉村と加藤は7月26日から8月3日まで台北に、その後8日まで香港に滞在し『表情』を執筆した。全10章のうち8章は台湾、末尾の2章は香港にかかわる論述である。ただこの旅行は、明記されてはいないものの8月1日から6日まで台湾を訪問した岸信介の周囲がアレンジしたものであろう。「はしがき」では協力者として、岸派の実力者で刊行時には行政管理庁長官だった川島正次郎や寺島などへの感謝が述べられている(はしがき2)¹⁸。第8章には、岸の訪台前と訪台後に東京でおこなったインタビュー、および台湾での「大歓迎」の様子や台湾と香港メディアの報道内容の紹介がある。

滞在中には複数の政府関係者が会見におうじている。ただ、同年3月30日から4月6日まで外交部のまねきで訪台した『現代』の著者の木内が、完全に外交部の準備した行程にそって行動し、総統蒋介石、副総統陳誠、総統府秘書長張群、外交部長沈昌煥、經濟部長楊繼曾などと会見をかさねているのに対して¹⁹、吉村と加藤は新聞局をとおして旅行の計画を立てたり要人との会見の約束をとったりはしているものの、訪台前にすべてのスケジュールが決まっていたわけではなく、また台北やその近辺では自分たちの判断で行動する余地もあったようである。沈昌煥と張群に会見を申しこんだものの、沈には陳誠の訪米随行、張には岸を台湾へむかえるための準備で多忙なことを理由にことわれ、「台湾大学総長および数人の教授たち」との面会も、入試業務のためになかなかた(31、136、122)。

26日に松山空港では黄老生と劉世宏という二人の新聞局の職員が吉田と加藤を出むかえているが、やはりこのときに空港に現れ、その後台北の街中を案内したのが黄崇西・政旺父子である。「わたしたちが東京で知り合った友人で、崇西氏はブリジストンタイヤの総代理店台湾貿易行(ママ)の社長、息子さんの政旺さんは日本トレーディングKKの台北駐在員である」(1-2)と紹介されている²⁰。

「台湾貿易行」は「台隆貿易行」のあやまりだと思われ、黄崇西は今日の台隆集団の創始者である²¹。到着日の昼間は黄父子が台北の街中を案内し、夜には黄政旺がキャバレーやダンスホールに吉村と加藤を帯同、翌々日には黄政旺が基隆など北海岸をタクシーで案内

院議員選挙で初当選した。あさひ輝いた人々編さん委員会(2017:40)には、撮影時期は不明だが、台北で蒋介石と会見した際の写真が掲載されている。

¹⁸ 渡辺(1958:110-123)。

¹⁹ 「關於木内信胤訪華事」(1961年3月15日)、『日本政要訪華(六)』、『外交部檔案(亞東太平洋司)』、國史館藏，典藏號：020-010102-0098。「木内信胤訪問案」、『日本人士訪華(十三)』、(1961年3月30日～4月6日)、『外交部檔案(禮賓司)』、國史館藏，典藏號：020-100900-0022。

²⁰ 「日本トレーディングKK」は今日の三井物産プラスチックの前身の一つだと思われる。吉田と加藤は香港でもこの会社の駐在員に世話になっている(151)。

²¹ 蔡(2020:36-40)。

している。

『表情』に行程の一覧はないが、その記述から、かれらがいつどこへ行き、だれと会ったのか、以下のとおり推定できる。

[表] 吉村暁と加藤芳男の行程

日付	行程
7 月初旬	中華民国大使館で公使張伯謹と会見。
25 日	岸信介宅をおとずれ訪台について取材。羽田空港発。
26 日	松山空港着。宿泊先の東方飯店へ。日本大使館訪問。黄崇西・政旺父子の案内で台北市内観光。黄政旺の案内で万里紅（キャバレー）と万国連誼社（ダンスホール）へ。
27 日	タクシーで陽明山に行き帰路に孔子廟へ。新聞局の劉世宏とともに外交部政務次長許紹昌を訪問。圓山大飯店での新聞局長沈劍虹による歓迎宴（国防部新聞局長、外交部アジア局長・参事官、新聞局副局長、中国広播公司総経理、中日文化経済協会副幹事長などが同席）。
28 日	黄政旺とともにタクシーで基隆、金山、淡水、北投をまわる。劉が同行し鉄道で台北駅から台中駅へ。台中市内散策。台中鐵路飯店泊。ホテルの部屋で劉と歓談。
29 日	劉が同行しハイヤーで故宮博物院、中興新村へ。省政府会議室で新聞処主任秘書から省内事情の説明を受ける。その後、日月潭へ。鉄道で台中駅から台北駅へ。
30 日	国防部随員（中佐）とともに、軍用機で松山空港から金門へ。金門防衛司令部政治部副主任（大佐）が出迎え。副主任の案内で地下陣地、金門地区心戦指揮所へ。金門防衛司令部で同政務委員会委員の王和璞（少将。1929 年（日本）陸軍士官学校卒）による歓迎宴。金門中学で校長による案内。古寧頭、金門官兵休暇中心、金門広播電台をまわる。松山空港へもどった後、随員とともに夕食。
30 日前後	東方飯店の「王さんというボーイ」と日本語で会話。
31 日	政務委員蔡培火を自宅に訪問。
31 日前後	「国民政府部内の中堅幹部」と夕食。
8 月 1 日	
2 日	劉の案内でアジア反共連盟中華民国総会理事長谷正綱を訪問。第一商業銀行に台湾省議会議長・第一商業銀行頭取黄朝琴を訪問。圓山大飯店で、中日合作策進会・アジア反共連盟中国総会・中日文化経済協会による岸の歓迎パーティーに出席。
3 日	松山空港から香港へ。
8 日	香港から東京へ。
11 日前後	岸の訪台に同行した福田赳夫を訪問（おそらく岸派事務所）。
14 日	個人事務所に岸を訪問。
不明	重慶南路周辺での散策。みやげ物屋の店員と日本語で会話。

4 『表情』が語る「台湾論」

では、『表情』の記述を具体的に見ていこう。

まず、戴国輝が言及していた蔡培火との会見についてである。蔡培火は日本統治期に台湾人の政治・民族運動で中心的な役割をはたし、第二次世界大戦後は中国国民党に入党、1950 年から 1966 年ま

で行政院政務委員(無任所大臣)の地位にあった²²。「台北市の西南部もはずれに近い永康街」の蔡宅に同行した新聞局の劉が、前日電話で吉村と加藤が会いたがっていると伝えたと、蔡は即座に翌日会うことを承諾したという。「料理屋店主から無任所大臣—蔡培火氏 おおいに語る」と題された一章で蔡は、日本人の対中国観、「大陸反攻」へ向けての決意、本省人と外省人の関係、中国共産党、敗戦後の中国大陆からの日本人の引き揚げについて熱弁をふるっている。

中国大陆からの引き揚げ経験者である吉村と加藤は、中華民国は日本人の引き揚げにあたって最大限の誠意をしめしたと蔡が論じるのを聞いて、次のように述べる。

わたしたちは、素直な気持ちでもう一度このことばを考えてみるべきだと思った。…“引き揚げ”ということばの背後には、日本政府の施策よりももっと大きな力が動いていたことをあらためて考える必要があったのではあるまいか。そして“ひとむかし”前のできごとが、今日の世界政局にのぞむわたしたちの心構えに、何ほどかの影響を与えたとしても不思議はあるまい(114)。

1945年8月15日に発表された蒋介石の「抗戦勝利告全国军民及世界人士書」に端を発し、第二次世界大戦後の中華民国と日本の関係で物語化された「以德報怨」言説が²³、蔡と吉村・加藤のあいだでも共有されている。台湾独立運動の側からは蒋介石政権に取りこまれた裏切り者としてきびしく指弾されていた蔡だが²⁴、吉村と加藤に言わせれば「中国への忠誠をつらぬいて今日の榮職に到達した」ということになる(99)。みずからも中国大陆で「日本の捕虜と居留民の日本送還の任に当り」「総統の意向を体して一切を処理し」という蔡が、「今日、中華民国は苦境に立っております」と語るのを前に(113-114)、吉村・加藤は自分たちの「“ひとむかし”前」をかさねあわせながら蒋介石政権への支持をあらたにする。ただ、「大陸反攻」を力説する蔡に対して、「わたしたちは、これをまちがいだということはできない」としつつも、「核戦争を恐れ、世界戦争の誘発をにくむ日本人の切実な気持ちを、この老政治家に訴えなければなるまいと思った」と率直な気持ちを吐露している(102)。

吉村・加藤は、蔡や他の政府高官との会話のみならず、新聞局の劉の語りも『表情』に登場させる。劉は台湾の経済成長や国民生活の向上を言い、「わたしたちサラリーマンも日本のように生活水準は高くないが、共産党と対決し、戦争をしているのだからやむを得」ないと述べる。また、7月28日に台中への車内で会った客が農業政策批判とともとれる話をしていたことを引き合いに出し、台湾

²² 蔡(2000:67)。

²³ 深串(2019)、黄(2004)。吉村と加藤は7月上旬に中華民国大使館で公使の張伯謹からも同様の話を聞いている。

²⁴ たとえば照魔鏡(1961:63)。

では政策に不満があってもそれを自由に話すことができる、政治的に「若干の不自由」はあるにしても、「わたしたちは大目的をもって、共産党と対決しているところだから、やむを得ないことです」と、ここでも中国共産党を持ち出して現状を正当化している(53-54)。

吉村と加藤は「国民政府部内の中堅幹部」に単独で会って、雷震事件をふくむ政府に対する不満を聞き、「台湾の光と影—戦後から陽明山会談まで」という章も執筆している。雷震は『自由中国』で蒋介石政権を批判した外省人知識人で、本省人政治家らとともに中国民主党的結党を企図したが、1960年9月に逮捕され、翌月禁固10年の刑を受けた。台湾の「自由中国」勢力と海外の民主反共勢力との関係強化を警戒した政府によって、いわゆる陽明山会談が二度にわたって開催されたのは、吉村・加藤の来台前後の7月上旬と8月下旬である²⁵。中国大陆出身の「中堅幹部」は雷震の逮捕と『自由中国』の停刊をなげき、次のように批判する。

貧民くつにゆくと南京虫がいます。人殺しも新聞にでています。貧乏人がまだたくさんいます。そうかと思うと金持ちはぜいたくをして、子供をアメリカに留学させています。このような矛盾を解消しなければだめです。国民党の一党独裁ではいけません。中共に似たものになってしまいます。いろいろな意見を出して、政府の方針を決めてゆかなければいけません。雷震氏はそれを指摘し、実行しようとして捕まりました(117-118)。

インタビューがかりに架空のものだったとしても、ここで独裁政権に対する批判が展開されていることはうたがいない。新聞局や大使館の関係者が『表情』を読んだとすれば、こうした批判をどのように受けとめたであろうか²⁶。とはいえ、「中堅幹部」の話はここでは終わらず、続けて民主化に対する楽観的な展望がしめされる。

大陸光復を実現するためには、台湾の民生を安定し、生活を向上させて、自由中国がこんなにすばらしいということを世界にみせるべきです。陽明山会談は、その点よいことでした。雷震事件によって暗くされたわたしたちの気持ちも、陽明山会談の実現によってだんだん明るくなるような思いです。何ごとにあれ、民主政治というものは広く人材を集め、意見をただすことから始めるべきです。大陸からきた人も台湾生まれの人も区別なく、真剣に今日の中国の問題点について論じ合い、建設的な考えをまとめあげてゆく努力が積み重ねられるならば、台湾の力はどんどん強くなることでしょう(121)。

さて、この「中堅幹部」が言う「大陸からきた人も台湾生まれの

²⁵ 薛(1997:49-82)。

²⁶ 東京に戻った後の岸へのインタビューには、「「わたし(岸を指す。富田注)は台湾における反共の勢力はそのまますべて国民党支持派ではないと理解したが、この点反共の立場に立つ人々の統合団結がさらに必要であろう」と国民政府に対する批判をもらした」(146)とある。

人も区別なく」というのは省籍問題にかかわることである。本省人と外省人の「疎隔」が「日本の識者たち」の共通の関心事だというのが吉村・加藤の理解だった²⁷。かれらは、「ある台湾出身のサラリーマン」から「外省人と本省人の心がしっくりゆくようになる」までに、半世紀にわたる日本統治とおなじぐらいの時間が必要かもしれないが、「それは反乱とか、革命とか、台湾の独立運動とかにつながるようなものではない。もっと微妙な心の問題である」と聞き、その見方を会う人々に問うてみたところ、「外省人からも本省人からも支持された」という(104)。岸も「よく外省人と本島人(マ)の疎隔の問題について語られるが」と切り出し、本省人のあいだの不満や外省人による高位の官職の独占も認識しているが、「感情がぬきさしならぬアツレキとなって、爆発する」ような危険までは感じていないと述べている(146)。蔡培火は、「本省人も外省人も同じ黄帝の子孫であることを忘れてはいけ」ない、「少しぐらいの感情の違いがあっても、国策には関係のないこと」と語っている(105)。

吉村・加藤は、土地改革が省籍問題にも関係していると考える。「本省人の多くはほとんど農業に従事する人」で、「農民が心から政府の行なった土地改革に共鳴を感じ、喜びとしているならば国民政府に対する強力な後継者となり、外省人とも真の同胞として協力、相和すこともできるはず」だというのがその理由である。省政府では、「台湾における農地改革はどのようにすすめられ、これによって農民はどんな恩恵を受けたのか」と問い、小作農の負担軽減や農民所得の伸長、地主の土地所有の制限のための政策を説明されて、「台湾では土地改革がひじょうに成功し、「耕者有其田」理想が具現化されつつあることは否定すべくもない」と結論づけている。これに続けて、「二十九才の青年で新竹県の農家の次男坊」だという東方飯店のボーイから聞いた話を付記しているが、新竹のあたりは「米の単作ばかりだから一番もうからないですよ。南に行くほど、バナナ、パイナップル、野菜など金になるものを作っているから楽だということです」という発言を紹介してはいるものの、農家の生活はおおむね良好であると読者に印象づける内容になっている(70-72)。

なお岸も 8 月 14 日のインタビューで、土地改革の成功が農業の生産性を向上させている、農機具や肥料を安価にすることで農民の生活水準がさらに高まるであろうと述べている(146-147)。

おわりに

台湾に明確な印象を持たない日本の読者は、『表情』の「台湾論」にふれてどのような感想をいだいたのだろうか。吉村・加藤

²⁷ 木内も訪台時に、「一部の人がいう」「台湾人と大陸人」の対立がほんとうにあるのかどうかに「最大の意識を集中した」と述べている(『現代』64 頁)。

は、みずからの引き揚げ経験を重ね合わせて蒋介石への感謝をにじませながら、その台湾統治を支持する。政治面で多少の不自由はありつつも、台湾の人々は政策を受け入れている、本省人と外省人の対立も解消に向かいつつあるというのがかれらの見立てだった。

もちろんこうした見方は同時代において批判をまぬがれなかった。冒頭であげた蔵居の書評は、「著者が現実に見聞したもの、または政府要人との会見などをやわらかく表現したもので、旅行案内としても役に立つ」とそっけないが、『表情』の刊行後まもなく

『台湾青年』に掲載された論評は、「虚偽と空疎だけのこの本には「真実」などというものはなにもない」「僅か 8 日間の旅行であるにしろ、この間の印象、聞いた話に加え、台湾内外の資料を分析してえた発見、思考など爪の垢ほどもありはしない」と酷評している²⁸。完全に政府の準備した行程で台湾をまわった『現代』の木内にくればれば²⁹、市井の人々との日本語でのやりとりもふくめ、多様な台湾の表情にふれる機会もあったはずだが、土地改革や本稿では論じられなかった産業政策の「成功」を語り、二・二八事件での国民政府に対する蜂起や本省人と外省人の感情的対立に一定の理解をしめしつつも³⁰、蒋政権のもとでの両者の融和の必要性を言い、また台湾独立運動に対して否定的態度をとっている点では『現代』と大差ない。

当時の蒋政権と岸をリーダーとする自民党の国府支持勢力の密接な関係を背景として生まれた書物であるということをふまえつつ、本稿では吉田と加藤が日本統治が終わって 16 年後の台湾/自由中国に何を見たのか、その空間をどのように論じていたのかをさぐってみた。くりかえすが、戴国輝は吉田・加藤の政治的立場や『表情』の内容とは相いれなかったはずである。しかし、真摯に台湾研究にとりくもうとすれば、この書物が「多くの研究の糸口もしくは示唆をうけられるはずのものである」という戴の指摘はそのとおりであるし、また当時の日本の学術研究が台湾に向けていた視線を批判的に照射することにもなっていると考える。

[参考文献]

- あさひ輝いた人々編さん委員会編『あさひ 輝いた人々』千葉県旭市、2017 年、40 頁。
井上正也「国連中国代表権問題と池田外交：国府「分断固定化」構想をめぐって、一九五七—一九六四」『神戸法学雑誌』57(1)、171-258 頁。
大村立三『二つの中国』弘文堂、1961 年。
木内信胤『現代の台湾』世界経済調査会、1961 年。
蔵居良造「苦悶する歴史の解明」『週刊朝日』1965 年 2 月 12 日号、81 頁。
近藤俊清『台湾の命運』みすず書房、1961 年。
近藤俊清「盗作の汚名は返上する—自著『台湾の命運』への疑惑について」『日本読書新聞』1962 年 2 月 12 日、7 面。

²⁸ 鄭(1961:23)。

²⁹ 『現代』には興味深いことに「遺徳報怨」への感謝を述べる記述はない。

³⁰ 黄朝琴は二・二八事件前後の台湾についても二人に語ったようである(125)。

- 清水麗「日華関係再構築への模索とその帰結——一九五八-七一年」、川島真、清水麗、松田康博、楊永明『日台関係史 1945-2008』東京大学出版会、2009 年、67-94 頁。
- 照魔鏡「蔡培火」『台湾青年』12、1961 年、63 頁。
- 戴国輝「台湾」『日本における発展途上国の研究—「アジア経済」100 号記念特集』アジア経済研究所、1969 年、53-82 頁。
- 千葉県総務部統計課編『千葉県勢要覧 昭和 36 年版』、1962 年。
- 鄭飛龍「吉村暁、加藤芳男両氏に告ぐ」『台湾青年』12、1961 年、23-24 頁。
- 東南アジア研究会『台湾の表情』古今書院、1963 年。
- 新島淳良、野村浩一編『現代中国入門—何を読むべきか』勁草書房、1965 年。
- 春山明哲「日本における台湾史研究の 100 年—伊能嘉矩から日本台湾学会まで」『アジア経済』60(4)、2019 年、27-56 頁。
- 深串徹『戦後台湾における対日関係の公的記憶:1945-1970s』国際書院、2019 年。
- 森宣雄『台湾/日本—連鎖するコロニアリズム』インパクト出版会、2001 年。
- 吉次公介「池田＝ケネディ時代の日米安保体制」『国際政治』126、2001 年、37-51 頁。
- 吉村暁・加藤芳男『自由中国の表情』有信堂、1961 年。
- 渡辺恒雄『派閥—保守党の解剖』弘文堂、1958 年(2014 年復刊)。
- 黃自進、〈抗戦結束前後蔣介石の対日態度：“以德報怨”真相的探討〉、《近代史研究所集刊》45、2004 年、頁 143-194。
- 蔡茹涵、〈手創館、松本清、養樂多 都是這個神秘家族引進！〉、《商業周刊》1716、2020 年、頁 36-40。
- 蔡培火、〈家系與經歷〉、《蔡培火全集—家世生平與交友》吳三連台灣史料基金會、2000 年。
- 薛化元、〈從反共救國會議到陽明山會談(1949-1961):對朝野互動的一個考察〉、《法政學報》7、1997 年、頁 49-82。